

# 宮沢賢治作品における〈権力〉の在り処

— 「山男の四月」「なめとこ山の熊」を手がかりに—

鈴木 健司<sup>(注1)</sup>

## Positioning of “Power” in the Works of Kenji Miyazawa: An Analysis of “The Forestman in April” and “The Bears of Nametoko”

Kenji Suzuki

Kenji Miyazawa published the literary work of “The Restaurant of Many Orders” in 1924, when the development of proletarian literature was being observed. Proletarian literature depicts the world on the basis of the perception of society, that is, industrial workers vs. capitalists. Through the works of “The Forestman in April” and “The Bears of Nametoko”, this paper is an analysis of the perception of society, especially where and how power has been depicted in the works of Kenji Miyazawa.

Key words : “The Forestman in April” “The Bears of Nametoko”  
“Proletarian literature” “power”

### — はじめに

宮沢賢治作品（ここでは主に童話を指す）には、一作ごとに異なる趣向が見られ、作家としての才能の豊かさを感じずにはいられない。宮沢

---

注1 文教大学文学部

賢治は三七歳で亡くなっている。したがって、実質的な作家生活は長く見積もっても一五年程度といえるだろう<sup>(注2)</sup>。その間、詩作品を除き、宮沢賢治は百編近い童話作品を書き残した。

一九二四年（大正13）に童話集『注文の多い料理店』を刊行している。しかし、その後は、雑誌掲載作品が数点あるものの、大多数の作品は生前未発表作品として死後に見出されたものであり、宮沢賢治は生涯を通じ、作品によってお金を稼ぐことはなかった<sup>(注3)</sup>。その意味では、プロの作家と言い難く、かといって、アマチュア作家という言い方も適切ではない。宮沢賢治はプラハ出身のフランツ・カフカ（1883～1924）に例えることができるだろう。カフカは保険局に勤めながら作品を執筆し、死後、彼の作品は評価され、20世紀を代表する作家の一人と目されるようになった。

## 二 初期作品の特徴

宮沢賢治の初期作品の幾つかは寓話的な構造を有し、シニカルかつユーモラスな内容で明解なストーリー性を持つ。「蜘蛛となめくじと狸」「ツェねずみ」「クンねずみ」「鳥箱先生とフウねずみ」「蛙のゴム靴」などその例といえるが、単に寓話的作品と呼んで処理することのできない「貝の火」や「よだかの星」のような、特異な作品も書かれている。これら二作品も含め、これから本稿で考察しようとする〈権力〉の問題は、初期作品においては、いまだ重要な位置を占めるに至っていない。そのことは「カイロ団長」に典型的に示されている。「カイロ団長」では、「王様の新しいご命令」が発せられ、資本家と労働者との立場が逆転す

---

注2 弟である宮沢清六が大正七年（1918）頃、兄から「双子の星」を読み聞かされたという。

注3 1921年（大正10）、『愛国婦人』に童話「雪渡り」を発表し、生涯唯一の稿料5円を得たとされる。

るのだが、この場合「王様」は確かに〈権力〉を持つ者であるが、この王様は決して暴君になることがない点で、社会の現実を反映してはいない。私はかつてこの王様のいる作品構造をジャータカ（釈迦前生誕）として捉えられるのではないかという視点を提示したことがある<sup>(注4)</sup>。このような構造は「貝の火」にも通じるのだが、王様とは仏教でいう転輪聖王のような存在と言えるだろう。とするならば、やはり王様を〈権力〉と解釈することは、ふさわしくない。

私が言うところの〈権力〉は宮沢賢治の社会認識と深くかかわっており、童話集『注文の多い料理店』に収められた諸作品に至りようやく見出されるものである。この童話集は、宮沢賢治の社会認識のありようが、混交した形で見え隠れしている。私の判断で作品の順番を入れ替えて示すと次のようになる。「水仙月の四日」「鹿踊りのはじまり」「狼森と笹森、盗森」「どんぐりと山猫」「注文の多い料理店」「山男の四月」「かしわばやしの夜」「月夜のでんしんばしら」「鳥の北斗七星」という順番である。宮沢賢治の社会認識が最も見えにくいのが「水仙月の四日」や「鹿踊りのはじまり」で、それから「狼森と笹森、盗森」「どんぐりと山猫」あたりで少しずつ社会の枠組みが作品に見え初め、最後の二作品「月夜のでんしんばしら」と「鳥の北斗七星」に至ると、電信など近代を象徴するシステムや、戦争といった社会的出来事が物語に組み込まれ、そこに賢治の社会認識が明確に見て取れると言えるだろう。

このように並べ替えてみて改めて気づくことは、作品としての評価が高い「水仙月の四日」「鹿踊りのはじまり」の二作品には、賢治の社会認識の要素がきわめて薄くしか表れておらず、その分、独自の自然観に基づく作品となっていることであり、逆に、社会認識の要素が濃く

注4 『宮沢賢治文学における地学的想像力－〈心象〉と〈現実〉の谷をわたる－』第4章「背景としてジャータカ〈貝の火〉〈鳥捕り〉の生成」、蒼丘書林、2011/05

浮き出ている「月夜のでんしんばしら」、「烏の北斗七星」などは、あまり高い評価を受けることがない。むろん、統計的に調査した結果ではなく、私が接し得る範囲や私個人の評価も交じっているので、正確な表現ではないが、佐々木八郎（当時、東京帝国大学経済学部生）が学徒出陣に際し「烏の北斗七星」を読み、「憎むことのできない敵」を撃つために戦争に駆り出されていく己が運命をむりやり納得させようとした心的行為は、賢治の社会認識が作品の表面にまで浮き出ていることと深くかかわっていることは確かだろう<sup>(注5)</sup>。

九つの作品のうち、ちょうど中間に位置するのが「注文の多い料理店」である。宮沢賢治をあまり知らない人でも、この作品だけは別格で、多くの読者から支持され続けている。それは童話集のタイトルとなった作品という意味だけでなく、賢治の社会認識が程よく作品に書きこまれており、読者はストーリーを追うだけでもそれなりの社会矛盾を作品から受け止めることが可能だからである。「二人の若い紳士」が、第一次世界大戦による好景気で成り上がった者たちであることは、これまで多くの研究者によって指摘されてきた。そして、成金である「二人の若い紳士」を支えているのは、首都東京であり日本という国家であることは明らかであり、かつ、明らかであるからこそ、作品の結末が読者にとって痛快なのである。

しかし、宮沢賢治の筆は、東京、日本という資本主義システムの悪を徹底的に叩くことまではしていない。それゆえに読後感が程よいのかもしれないが、同時代に書かれているプロレタリア文学と比較すれば、宮沢賢治のような社会認識はむしろ生ぬるいと感じられたかもしれない。筆者とすれば、作家としての宮沢賢治の社会認識は、時として鋭く日本

---

注5 『きけ わだつみの声』編者：日本戦没学生記念会、1949・10

社会の制度的矛盾に踏み込んで行ったと考えている。ただ、それはプロレタリア文学と異なった形の社会認識であるため、社会認識という視点から宮沢賢治作品があまり分析されてこなかったという経緯がある。

筆者は、宮沢賢治における最も特徴的な社会認識が確認できる作品として、「なめとこ山の熊」を挙げたいのだが、そこに至る前に、童話集所収の「山男の四月」を見ておきたい。この作品にも十分に宮沢賢治らしい社会認識を見て取れるからだ。

### 三 山男への視点の同化

「山男の四月」という作品の概略は次のようなものだ。

西根山に住む山男が、ふらふらと七つ森あたりまで出かけてくる。そこは、もう町のすぐ近くだ。山男は町へ入ると殴り殺されるので、人間の木樵の姿に化けて町の入り口に立つ。山男はそこで、怪しげな薬売りの陳という「支那人」に出会う。陳は山男に偽の六神丸を飲ませ、体を小さな箱のようなものに変えてしまう。陳は山男を背中中の行李に入れて歩き出す。行李の中には同じように陳に騙された仲間（上海の人）がいて、陳の手口を聞かされる。それから、山男はしゃくにさわって大声で怒鳴ったり、また、陳の身の上に同情しておとなしくなったりするが、最後は、陳の隙について体の大きくなる薬を飲み、無事に元の体に戻る。陳は体を大きくする薬と小さくする薬を同時に飲むはずだったが、誤って体を大きくする薬だけ飲んだため、巨大な体となり山男を追いかけてくる。しかし、すべてが夢だったことが明かされ物語が終わる。

この作品には日本人はほとんど登場しない。背景として点描されるだけである。その代り、町の入り口の魚屋の軒に下げられている〈章魚の足〉に焦点が当てられ、「郡役所の技手の、乗馬ずぼんをはいた足よりまだりっぱだ」と称賛される。「郡役所の技手」とは、判任官の役人で、同じ判任官の警察の役職に比べるなら「警部・警部補」相当とされる<sup>(注6)</sup>。したがって、この文脈は、山男にとって、章魚の足の方が人間社会でそれなりに認められた人々よりもなお立派であると主張していることになるだろう。

柳田国男著『遠野物語』(明治42)により、その民話的存在が広く知られるようになった山男であるが、宮沢賢治作品における山男は、章魚を自分の同類と考えているのである。この視点はとても重要で、その具体的理由は定かではないが、山男は「町へは行って行くとすれば、化けないとなぐり殺される」と木樵<sup>きこり</sup>の姿に化けている。このことから明らかのように、山男は自己を人間とは捉えていないのである。そのような存在の山男を物語の中心に据えたところに、作者の意図をくみ取ることができると筆者は考えている。作者がこのような作中人物を中心とする視点を採ったとき、多くの場合、山男は山男を排除するものと対比的に書かれるのが通常であろう。しかし、作者は決して山男を排除する側、すなわち〈町〉のもつ〈権力〉に対し、批判的に書くことがない。このような構図こそ、宮沢賢治作品の特徴と呼べるものである。

作者は山男の傍らに、薬売りの陳を配した。その結果、山男・章魚・陳が同列という妙な構図が出来上がった。人間社会から疎外されているのは山男だけではない。薬売りの陳もまた疎外された存在だからである。陳は中国人で上海の方面から来たらしいことが明かされる。明治後半か

---

注6 国会図書館リサーチ・ナビ

ら大正にかけては、中国からの日本への留学生が増える時期と重なるが<sup>(注7)</sup>、陳はおそらく中国社会から疎外されるかたちで日本に流れ着き、同時に、日本社会からも疎外された存在である。資本主義構造の中に組み込まれている陳は、貨幣経済に従うしか生きる道はなく、偽の六神丸を売ってその日暮らしをしている。そのような中国人は当時作者の周辺に事実存在していたようだ。大正13年9月25日付の「岩手日報」に「いかゞわしい支那行商人が盛岡に殖へた」という題で、つぎのような記事が掲載されている<sup>(注8)</sup>。

数日前から当市に続々支那の行商人が入りこんだが彼等六神丸とか朝鮮人参などを売ってあるく。ところが大抵六神丸はニセ物で朝鮮人参エキスなどくとくと飴に苦味チンキを混じたものへレットルを貼って五円・十円と云ふ定価をつけてゐる。押売り同様なものだから堪らない尤も五円・十円と定価をつけても原価は瓶と中身で二十銭そこそこしかかかかってゐないのだから支那人も五十銭か一円くらいまで値切った所で売ってゆくという有様。この辺の事情のわからない人たちは甘々載せられるからこのさい警戒が肝要であると其筋の人が語ってゐる。

このような中国人は、日本社会の最外縁に生きているといえるだろう。作者はそのような場所に陳を置いたのである。そして、そのような場所は同時に、貨幣経済の存在しない山男の世界の最外縁と接している場所であるとも指摘できるだろう。山男は自給自足の下に生きており、もし

---

注7 たとえば、魯迅は1902年～1909年まで日本に留学している。また、孫文は亡命先としてしばしば日本に滞在した。

注8 松田司郎編集の「ワルトワラ」第16号より（原資料は確認済み）。

山男が、貨幣経済に支配される〈町〉にさえ行かなければ陳のような悪事をせずに生きていくことは可能である。では、なぜ山男は〈町〉に入ろうとするのか。山男が〈町〉の市などに現れる話は『遠野物語』にも見られることなので、山男にも〈町〉に行かなければならない事情があるのだろう。また、〈町〉に入った山男が、貨幣を持たないが故に〈町〉から締め出される話が、他の宮沢賢治作品「祭りの晩」で示されている。

「山男の四月」の特徴は、〈町〉の最外縁を舞台にした物語というところにある。そこに作者は、山男と陳という〈町〉という〈権力〉から拒絶されたもの同士として、珍道中ともいえるドタバタ劇を繰り広げるのである。この作品で〈町〉が記述されることはほとんどないが、山男と陳とのドタバタ劇を操っている〈権力〉としての〈町〉は、作品を構成する要素としてなくてはならないものであり、読者は、山男と陳の向こう側に〈町〉という〈権力〉を透かし見ているからこそ、山男と陳の織り成す喜怒哀楽のドタバタを、極めて人間的なものとして感じ取っているのである。

「山男の四月」に関するこれまでの分析を、次に図1で示す。宮沢賢治の物語空間は、主に「山男」と「陳」との間で形作られ、〈権力〉と

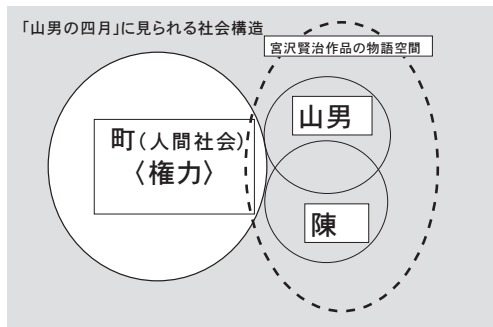


図1



しての「町」は、わずかに物語空間と重なるだけである。

#### 四 小十郎への視点の同化

「なめとこ山の熊」という作品の概略は次のようなものだ。

なめとこ山の麓に小十郎という熊撃ちの名人がいた。小十郎は、一家七人を養うため、なめとこ山に棲む熊を撃ち、肝と毛皮を町に売って生活していた。本当は熊に申し訳ない気持ちでいっぱいであった。熊にとって撃ち殺されるのはもちろん迷惑なことであったが、小十郎を嫌っていたわけではなく、本当は好きなくらいであった。小十郎は熊の言葉さえ分かる気がした。

鉄砲撃ちの名人・小十郎も、町の荒物屋に毛皮を売りに行くときはみじめだった。毎回毛皮は荒物屋によって安く買いたたかれた。しかし、お金を得て米を買わなければならない小十郎は、受け入れざるを得なかった。ある日、小十郎は、木に登っている熊に出会う。鉄砲をつきつけられた熊は、木から下り、し残した仕事があるから二年だけ待ってくれという。小十郎はそれを聞き見逃してやった。すると二年後、熊は小十郎の家にやって来、約束どおり死んで倒れていた。

一月のある日、小十郎は水に入るのが生まれて初めて嫌になったと年老いた母に告げ、猟に出かけて行った。その日は白沢から峰を越えたところで猟を始めた。するとまもなく不意に熊が現れ、小十郎は撃ち損じ、熊に襲われてしまった。お前を殺すつもりはなかったという熊の声を聞き、小十郎は死を悟ったのち、熊どもゆるせと心でつぶやいた。三日後、死んだ小十郎を囲み、数多くの熊の姿が拝むような姿で伏していた、という場面で物語が終わる。

「なめとこ山の熊」という作品においては、〈町〉という〈権力〉がきわめてリアルに描き出されている。作中、「狐けん」<sup>(注9)</sup>という今日の「じゃんけん」に似た遊びを用いて、作者の社会認識が語られる。読者にとって、本来、世の中というものは「狐拳」のように平等に成り立っていてほしいという、願望がある。狐は庄屋に勝ち、庄屋は猟師に勝ち、猟師は狐に勝つ、という「じゃんけん」の平等性である。狐も庄屋も猟師も、勝ち負けにおいて平等であるはずなのだが、「なめとこ山の熊」では、そうはなっていないという。「日本では狐けんというものもあって狐は猟師に負け猟師は旦那に負けるときまっている。ここでは熊は小十郎にやられ小十郎が旦那にやられる。旦那は町のみんなの中にいるからなかなか熊に食われない」と語られるのである。「旦那は町のみんなの中にいるからなかなか熊に食われない」という箇所が重要で、そこにおいて「狐拳」の平等性は崩壊しているのである。小十郎はその現実を仕方ないこととして受け入れているため、常に町の荒物屋との関係性は弱者なのである。しかし、同時に小十郎には熊に対する優位性が保たれているのだから、絶対的弱者は熊ということになる。

したがって、「なめとこ山の熊」は、小十郎と熊との戦いの物語ということになる。物語は、勝者としての小十郎と敗者としての熊という社会学のもとに展開していかざるを得ない。ここに「山男の四月」の登場人物を当てはめるなら、山男は熊、小十郎は陳、〈町〉は荒物屋の旦那という、対応関係が浮き上がってくる。〈山男と熊〉は、力は強いが、鉄砲を持つ小十郎やウソのうまい陳に負けてしまうのである。では〈山男と熊〉に負ける〈小十郎と陳〉は〈町〉と荒物屋の旦那に勝てる

---

注9 狐・猟師・庄屋の三すくみの関係を用いた拳遊びの一種である。藤八拳、庄屋拳などとも呼ばれる。

のかというと、そうはいかず、常に負けるのである。その結果、「山男の四月」は〈山男と陳〉との戦いの物語となり、「なめとこ山の熊」は〈熊と小十郎〉との戦いの物語になるのである。これが、この物語に敷かれている基本的な社会構造である。

ところが、作者は、物語が基本的に抱え込んでいる不平等な社会構造に、微妙な振動を与えている。この振動は社会を崩壊に至らしめるほどの衝撃を持つてはいないが、微動を起こさせる程度の力を持つ。その微動は「山男の四月」において弱く、「なめとこ山の熊」において強いものとなっている。その差は、物語に描かれる〈町〉という〈権力〉の表出の度合いと比例する。すでに述べたが、「山男の四月」における〈町〉の実態は表現としてはあらわでなく、透けて見える程度である。そのため、読者は「山男の四月」の持つ社会批判の振動をかすかに感ずるだけとなる。〈夢落ち〉という物語の閉じ方から言っても、〈権力〉としての〈町〉は読者にとってフェイドアウトしてしまう要素としてある。それに対し「なめとこ山の熊」における〈町〉の実態は、かなりリアルな描きかたがされている。「ところがこの豪儀な小十郎がまちへ熊の皮と肝を売りに行くときのみじめさといったら全く気の毒だった」という一行から描写される、〈町〉の荒物屋の旦那の小十郎への老獪な商人の対応ぶりは、資本主義経済の矛盾を、地方の町の荒物屋という舞台にはあがるが余すところなく表現しているといってよいだろう。不当に安く買い叩かれたことを知っているはずの小十郎が、旦那の「じゃ、おきの、小十郎さんさ一杯あげろ」という、偽善そのものの親切に応じてしまうあたりにも、社会の流れにしたがって生きていかなければならない者の負の知恵というものが見えている。

## 五 語り手の物語への介入の意味

語り手の物語への介入とはどのようなことか。「山男の四月」は三人称視点の物語であるゆえに、読者の視点が山男の視点と重なることがあったとしても、やはり、読者は客観的に作品を読んでいることになる。それに対し「なめとこ山の熊」という作品は、基本的に〈語り〉の構造を有している。それは一人称の作品であることを意味している。「なめとこ山の熊」では、読者の視点は、それを語る「語り手」の視点と重なりつつも、多くの場合は語られる小十郎の視点と重ねられており、そのため、物語への〈語り手〉の介入といった唐突な出来事に驚かされる。

僕はしばらくの間でもあんな立派な小十郎が二度とつらも見たくないやないやなやつにうまくやられることを書いたのが実にしゃくにさわってたまらない。

このような語り手の介入は、他の個所にもみられるが、なぜ、このような方法が用いられたのかを考えてみたい。その前に確認しておきたいことがある。理論的には「語り手」の作者がいてもよいわけなので、この作品の場合は二人の〈作者〉が想定できることだ。このようなことは「山男の四月」では起こり得ない。「山男の四月」という作品を書いた〈作者〉一人がいるだけである。「なめとこ山の熊」の場合、上記の「僕」や作中の「私」が物語の「作者」であってもよく、また、「私」を創作した人が〈作者〉ということもあり得ることとして考えておく必要がある。このように整理したうえで、筆者が提起したいのは、「語り手」が物語に介入してくるものの意図である。〈町〉の荒物屋の旦那の描写は、物語中の「語り手」＝「私」によって行われている。筆者の解釈は次のようなものだ。「山男の四月」では、山男と陳との対立はしょせん

騙し合いのようなものなので、その騙し合いを生じさせた根本としての〈町〉の存在をフェイドアウトさせることが可能であったのに対し、「なめとこ山の熊」の場合、熊と小十郎は命のやり取りであるため、両者をそのような状況に追い込む根本となった〈町〉の存在を、物語中にくっきりと刻み込む必要があった。その役を果たしたのが「語り手」ということになる。小十郎に視点を固定させれば、〈権力〉としての「町」の存在を読者に訴えることは可能だったはずである。しかし、視点の固定化をした場合、小十郎の熊への〈やさしい眼差し〉という、もう一つのねらいが表現しにくくなってしまふことになるだろう。宮沢賢治は〈町〉と争う小十郎を描くことを望まなかった。この作品の成立する場所は、「熊・小十郎」VS「町の旦那」にあるわけではなく、熊と小十郎との関係性にあるのであるから、小十郎と町の旦那との対立や批判という要素は最小限に抑えられなければならないと言えるように思う。

しかし、読者は物語に「じゃんけん」の平等性を求めてもおり、熊と小十郎との物語だけで満足することはない。読者にとって「町の旦那」は必ず批判されなければならないのである。では、誰が批判するのか。〈語り手〉の物語への介入という出来事は、「じゃんけん」の平等性を求める読者への、「私」という〈語り手〉を生み出した「作者」の配慮の結果なのではないかと筆者は推定している。

けれどもこんないやなずるいやつらは世界がだんだん進歩するとひとり  
とりで消えてなくなっていく

これが〈語り手〉である「私」の社会認識である。このような「私」の思想に対し、「作者」の社会認識の甘さとして批判することは容易だろうが、筆者の考えでは、〈作者〉の社会認識が甘いのではなく、〈どう

にも動かない社会) に対し、より低い視点から、現実社会の持つ〈優しい眼差し〉の可能性に賭けようとした結果なのではないかと考えている。

山男はもう支那人が、あんまり気の毒になってしまって、おれのか  
らだなどは、支那人が六十銭もうけて宿屋に行って、鯛の頭や菜っ  
葉汁をたべるかわりにくれてやろうと思ひながら答えました。

(「山男の四月」)

けれどもお前に今ごろそんなことを言われるともうおれなどは何か  
栗かしだのみでも食っていてそれで死ぬならおれも死んでもいいよ  
うな気がするよ」

(「なめとこ山の熊」)

このような〈優しい眼差し〉は、対立構造があらわな物語構造にはう  
まく適合できないもののように思う。

宮沢賢治作品において、しばしば〈権力〉の在り処が不明確になって  
いるのは、極めて意図的な戦略である。しかし宮沢賢治は次第に〈権  
力〉の在り処を隠し切れなくなっていく。そしてそこに新たに宮沢賢治  
作品の複雑さも生じることになる。宮沢賢治作品の特質を示す指標の一  
つとなっていると言えるだろう。

「なめとこ山の熊」に関するこれまでの分析を、次に図2で示す。宮  
沢賢治の物語空間は、主に「熊」と「小十郎」との間で形作られ、〈権力〉  
としての「町」は基本的には深くかかわっていない。しかし、「山男の  
四月」に比べるなら物語空間との重なりがかなり増していると分析でき  
る。また、その重なり部分に、〈語り手〉の介入の存することを示した。

宮沢賢治作品における〈権力〉の在り処

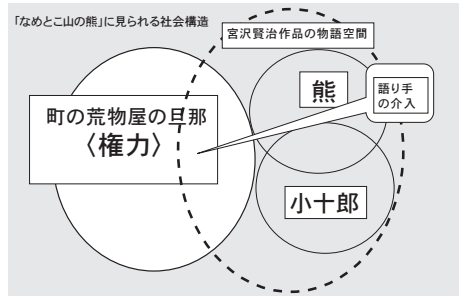


図 2

\* 本稿は、2018年11月3日に開催された、日本言語文化比較研究中・日・韓三国シンポジウム（北京外国語大学・文教大学・韓国日本語文化学会共催）において発表したものである。